

バトゥ
BATU ブルスラット
BERSURAT 村 調査報告書

2004年11月20日

報告者 坂 井 美 穂

東京地方裁判所 御中

第1 調査の概要

2004年9月20日、バトゥ・ブルスラット Batu Bersurat 村（以下、「当村」という。）の状況調査を行った。

この調査に際しては、村民の案内の下、当村集落及びゴム園の近くの視察を行った後、数名の村民から事情を聴取した。

第2 調査結果

以下、当村全体の視察と各村民からの聴取とに分けて報告する。

1 当村全体の視察結果

2004年9月20日、現地住民の付き添いのもと、現地視察を行った。結果は以下の通りである。

(1) 家屋、井戸、MCK

YULIDAR（ユリダル）氏（原告番号N962、女性、）の家屋（写真1）を視察した。

ア 井戸について

当該家屋には政府支給の湧水式の井戸は存しなかった。政府から支給されたのは、屋根つたいに雨水を溜める「水溜め」であった（写真2）。このため、雨がふらない時期は直ぐに干上がり、現在ではゴミ溜めの状況であった（写真3）。

ユリダル氏が、自費で掘った井戸も2基存したが、費用の関係で深くまで掘れず、一方は汚れた水（2日前に降った雨水とのこと。）が少し溜まっているだけであり（写真4）他方はゴミ溜めとなっていた（写真5）。

井戸がこのような状況であるので、同氏は、片道30分かけてダム湖に水を汲みに行くそうである。



(写真1)



(写真2)



(写真3)



(写真4)



(写真5)

イ 家屋について

家屋全体からひどい雨漏りの状況がうかがわれた。

屋根はトタンでできており、ところどころに穴が開いている上(写真7) 壁板にも隙間が開いているので(写真6) 雨水が室内に侵入し、雨漏りの跡が壁

など至る所に見られた（写真6）。このような雨漏りは、移転当時から続いている
そうである。

さらに、床については、カバーを掛けていたが（写真8）、その下はすぐに地
面であり、土石が露出していた（写真9）。



（写真6）



（写真7）



（写真8）



（写真9）



（写真10）

ウ MCKについて

家屋から10メートルほど離れた場所に、政府が用意したトイレの跡があった（写真10）。現在は、全く使われていない。

移転当初は、木とトタンで作られた囲いがあったが、トイレの仕組みが不十分ですぐに詰まってしまったので、誰も使わなくなり、そのうちに囲いも無くなってしまったそうである。

現在では、大人は湖まで用を足しに行き、また子供はその辺りで用を足すとのことである。

(2) ゴム園

続いて、M RASAD Dt BANDARO SATI (エム・ラサッド・ダトゥック・バンダロ・サティ)氏(原告番号N 1 0 2, 男性)と、ABRAR HS DT PADUKO SANZO (アブラル・ハーエス・ダトゥック・パドゥコ・サンゾ)氏(原告番号N 3、男性)の案内で、政府が用意したゴム園に向かった。

ア アクセスについて

ゴム園に行くには方法が2つある。1つは、Koto Tuo 村をバイクで抜ける方法で、もう1つは湖を渡る方法である。バイクを使う方が近道であるが、赤土だらけの道なので雨が降るとぬかるんで使えなくなる。今回は、安全な湖を渡る方法をとった。

しばらく砂利道(写真11)を行くと、湖が見えてきた(写真12)。雨季には草が生えている部分まで冠水するそうである。

今回は、ディーゼルエンジン搭載の小舟を使用したので、往復10万ルピアかった。時速15キロほどで、往復で約3時間であった。

村民の場合、費用がかかるので、自分たちで小舟を漕いで湖を渡るそうである。その場合、朝に村を出てから、ゴム園に最寄りの船着き場に着くのは午後2時頃になり、さらに、自分のゴム園まで徒歩で行くので、ゴム園に着くのは午後3時か4時になる。したがって、その日はその辺で寝泊まりして、ゴム園で働けるのは次の日からだそうである。



(写真11)



(写真12)

ダム湖からは所々立ち枯れの木が枝の先を見せており(写真13)、これらは腐っていた(写真14)。ゴム園の最寄りの船着き場からゴム園までは、徒歩であったが、道は整備されておらず(写真15)、森の中に分け入る状態であった(写真16)。このような状態で約50分歩いたところ、ようやく赤土の道が現れた(写真17)が、天候不良のため、これ以上進むことができず、あと徒歩1時間の距離にある両氏のゴム園までたどり着くことができなかった。このあたりはほとんど整備されておらず、雑草が生い茂った状態の農園ばかりであった(写真18、19)。

両氏の農園も同じような状態だそうだ。



(写真13)



(写真14)

ようやく船着場らしい場所に到着し、まずゴム園に案内してもらおうべく歩き出した。ところが道らしきものがまったく見当たらず(写真15)、付き添いで来てくれた ABRAR 氏はせっせと森の中へ入りだした(写真16)。



(写真15)



(写真16)



(写真17)

約50分ほど歩くと、ようやく整備されたようにみられる道に出た(写真17)。この道をまっすぐ行くと、上で述べたように、Koto Tuo 村を抜けて帰れるルートになっているらしい。しかし、このような赤土だらけの道では、雨が降るとバイクではどうしても通れなくなるため、仕方なく湖を渡るルートをとっている、と両氏は口を揃えた。なお、ここで天候不良のため、これ以上進むことは

できずに M RASAD 氏また ABRAR 氏のゴム園までたどり着くことが出来なかったが、船着場からこの辺り全部は、ほとんど整備されておらず雑草が生い茂った状態の農園ばかり（写真 18、19）であるという。もちろん、両氏の所有する農園も同じとのこと。彼らの話によると、ここから自分たちの所有する農園へ案内するとなると、あと 1 時間は歩かなければいけない、という。



（写真 18）



（写真 19）

2 住民からの聴取結果

上記のゴム園視察後、上記両氏のほか、ASNAWI（アスナウィ）氏（原告番号 N 26、男性）、ZAINAL ABIDIN Dt PAKOMA（ザイナル・アビディン・ダトゥック・パコモ）氏（原告番号 N 210、男性）他数名の村民から下記のとおり事情を聴取した。

（1）移転以前の村の状況について

ほとんどの村民は農業で生計を立てていた。米は 2 毛作で、収穫が余れば余所へ売っていた。野菜や果物も自給し、家畜も所有していた。ほとんどの村民が今より広い土地、農園を所有していた。

水も十分にあった。

子供達の教育についても、村の外の学校に通いに行く者がいるなど、教育レベルは今よりも高いものであった。

総じて、村人は生活に満足しており、幸せな生活を送っていた。

（2）移転過程について

80 年代前半、Riau 州 Kampar 県の 8 か村の Ninik Mamak（ニニック・ママック、慣習法指導者クラスの人物）が郡庁所在地である Batu Bersurat 村に集められ、県のアシスタント（県知事の秘書のようなもの）と会合を行い、その後、これらの者が 17 の条件を県に提出した。

その後、しばらく何もなく、90 年代初めに当時の Kampar 県知事 Saleh Jasit（サレ・ジャシット）が村で会合を開いた。その会合で、県知事は、住民のもっている

財産全てが補償される、移転先はすばらしいものである、と述べた。

特に、この Batu Bersurat 村に関しては、移転先がすばらしいということで、Anak Mas（金の子供；すなわち県知事の愛情を受けている子供、の意）という言葉が用いられたほどであった。

その後、91年初め頃に、政府が Riau 州各 8 か村から Ninik Mamak を選び、補償金の金額を勝手に決めてしまった。そこに出席した Ninik Mamak は、村に帰ってきてても住民の前に姿を現さなかった。

補償金については、現在にいたるまで、補償金を支払われていない村民がたくさんいるが、支払われた者についても約束より少く補償金とは名ばかりであった。

1996年1月、軍や警察が見張る中、住民は移転せざるを得なかった。なぜなら、一番最初に移転した Pulau Gadang 村では、移転を嫌がった住民が、軍に殴られたり、銃口を向けられたとの話が、村民の間に広まっていたからであった。

(3) 移転後の村民の生活について

移転後、村民は、約束と違う移転先の状況に愕然とした。ゴム園は全く整備されおらず生計手段がなかった。それでも生活補償が支給されている間は、細々と暮らして行けたが、生活補償が切れた途端、生計手段が全くないので、村民は貧窮に陥った。そこで、村民達は、ダム湖で漁をしたり、他人のゴム園で労働者として働いたり、ダム湖の近くで観光業を営む投資家や PT TANDUNG GROUP というガンビル農園会社に雇われたり、井戸を掘る仕事をしたりして、何とか生活している状態である。

以前は、子供にも十分な教育を与えられたが、今では家族が食べていくのが精一杯で、十分な教育にはほど遠い状態である。

このような状況であるので、村民の30%は何とかやって行けそうな者達であるが、70%は貧困層であると思われる。

(4) 裁判所に望むこと

このような苦しい生活から、村民たちが少しでも楽になるように、裁判所に被告達の責任を認めて頂きたい。もし、このままほとんどの村民が貧困のまま放置され、子孫も未来に希望が持てないとなると、子孫達が絶望してしまいます。

私たち及び子孫のために、是非この苦しい生活を理解して頂き、少しでも救済の手をさしのべて頂きたいと切実に願います。

以上